

【講演】

物語を「読む」私―『源氏物語』の読み方

浅野 則子
(日本語・日本文学専攻 教授)



『源氏物語』は日本の古典文学を代表する作品であるといつてよい。成立したと思われる平安中期から途切れることなく、様々な観点から読み継がれてきた作品である。光源氏という女性の理想とも思われる主人公は多くの読者を惹きつけて止まない。成立した当時から読者を納得させる時代背景を持ち、細やかな心情表現によって光源氏と女性達の関係が綴られる物語は女性の読者のみならず多くの男性にも読まれ、それぞれの「読み」方を確立してきた。『源氏物語』を「読む」ことは、どのような意味があつたのかを考えていきたい。

一 女性と物語―物語を「読む」女性―

物語とは、そもそもどのような役割をもっていたのだろうか。「物語」というと現在ではお話という意味で使われているが、

るが、まずは、『源氏物語』が読まれた時代における物語のありかたから考えてみたい。

「もの」を「かたる」ということを意味する「物語は、実際には存在しない語り手を想定し、その語り手が語って聞かせるという形をとっていた。語り手、聞き手が同じ場で作られた話を共有する、言い換えれば語り手と聞き手の共有の場で紡がれていくのが本来の物語であつたといえる。その多くは女房が女君に語っていたと考えられる。現在と違い、情報量が少ないこの時代において、女性達にとって、和歌は大切な教養であつたが、それは生活に即したものであり、その場その場の「空間的」な対処法を教えしてくれるものであつた一方、物語は時間の流れに従って進んでいく。女性達は「ここから」時間的「な生き方を学ぶ」となる。どのように心を持ち続けられるのか、これから先どのような世界が開けるのか、女性

達は物語を通して世界をみるということになるだろう。『源氏物語』の中から女性が学ぶ表現を見ていこう。

『源氏物語』の「蛭」の巻は物語論が語られている巻として知られている。源氏は養女となった玉鬘が物語に夢中になっっている様子を見て、「女性は髪が乱れるのも知らず書き写しているが、男性から見ると虚偽が多いとは知りながら物語に熱中する女性の気が知れない」と言ってしまう。ここには物語は婦女子のもてあそびものであり、男子は表だって読まないという意識が現れている。ここで玉鬘は女性の側から反論するが、玉鬘の気を惹きたい源氏は「物語というものは、神代からこのかた世間に起こったことを書き記したものだといえます。日本紀などはほんの一面にすぎないのです。これらの物語にこそ、道理にもかない、それぞれの場面で細かく表現した事柄が書いてあるのでしよう」と史書よりも物語に世の中の出來事が細かく記されているとし、さらに「誰その身の上として、ありのままに書き記すことはないにしても、よいことであれ悪いことであれ、この世を生きている人の有様を、見ているだけでは物足りないこと、聞いてそのまま聞き流しにできないことを、後の代にも言い伝えさせたい、そんな事柄のひとつひとつを心につつまきれずに言いおいたのが物語のはじめなのです」と物語論を口にする。ここで源氏は男性として史実とは違うことを理解した上で、物語が後の世ま

で語り伝えたいことを伝えている、と言っていることに注目したい。ここで源氏は、物語は史実ではなく、「物語」という形をとるひとつの真実であると言っている。源氏の物語論は、源氏という男性にとっての「読む」物語に他ならないのである。源氏は男性として、女性のものであった物語を「読む」ために、女性が物語から得るものに関しても注意を払っている。

入内させようとしている明石の姫君を養育している紫の上に対して、「姫君の御前でこの恋に染まった物語などは読んでお聞かせにならぬほうがよい。心の中にそっと忍んで恋心を抱いている娘の話などは、興味をもたれないにしても、こんなことが世間にはあるものだと、それを普通のように思われたのでは大変なことです」として物語を選んで読ませようとしている。女性にとって物語を「読む」ことは世の中を知ることであることを十分に理解した言葉であろう。「もの」を「かたる」という物語は、文字に記されてもまた、世界が共有され、女性にとっては教育のために使われることがここからは明らかにだろう。さらに源氏は「継母の意地悪な行いを書いた昔物語もたくさんあるが、それらは継母の心とはそうしたものだと思えるようなものであるからおもしろくない」と思い、姫君に見せるものをきびしく選り分け選り分け、清書させたり、絵などにも描かせている。物語を選んで読ませることこそ、物語が女子教育の役割をになっっていたことの証である。女性

が物語を「読む」ことは学ぶこと、知ることであった。それは、年齢を重ねた女性にとっても同様であった。源氏の正妻的な立場でありつつも、女三宮の降嫁により、その立場を失った紫の上は女三宮の降嫁後の自らの生き方を考えるために物語を「読む」。自分の特別とも思える半生を物語の男女との比較よって確認し、現在の身に降りかかったことを考えてみるのであった。

女性のために作られた物語はこうして女性によって教養、教育書として「読み」つがれていく。男性もまた、そのように物語の存在を理解することで物語は社会の中で認められていくのであった。

二 紫式部という作者

物語のありかたを考えた上で、次に紫式部という『源氏物語』の作者について考えみたい。紫式部は自身の日記の中で「宮中に出仕後の嘆きを書く時、「はかなき物語などにつけてうちかたらふ人、同じ心なるは、あはれに書きかはし、すこしけどほき、たよりどもをたづねてもいひけるを」と記している。宮中にお仕える前に物語を書き、それを友人に見せていたのである。紫式部は物語の書き手となって、多くの人に読んでもらうことで、人々との共感が生み出され、それによって

孤独の物思いから救われたとしている。この、共感しあうということこそが語り手と読者としてあった物語が、文字となっても残っている物語本来のあり方なのである。

紫式部にとつての物語は、しかしながら、彰子にお仕えることで変わっていく。道長は自らの娘である中宮彰子に皇子が生まれたお祝いとして『源氏物語』を美しく作り上げ宮中に持って行かせるのである。女性の物でしかなかった物語が華やかに脚光を浴びて女性の側から男性の側へと向けられていくといつてよい。娘を入内させることで政治力が増した道長にとつて、政治のために娘を使うように、女性の側の文学も取り込んだという見方もできるであろう。もはや、この時点での『源氏物語』は作者の手を離れ、美しい言葉で書かれた女性の文学の「形」でしかありえない。かつて、紫式部が物語に求めた「共感」とは離れてしまっているのである。

『源氏物語』はこうして、その存在を確かなものにしていき、紫式部という個性を超えた物語の系譜として受け継がれていくことになる。『源氏物語』の作者が「紫式部」であるという認識が定着したのは院政期であり、それまで藤式部と呼ばれていた作者が、現在のように呼ばれるのは「紫」という名が登場人物の「紫の上」に由来するからであった。物語は「読み」継がれていく上で作者をも新たに作り上げていくのである。

三 物語を「読む」私

女性のものでありながら、その存在を男性にも認めさせた『源氏物語』は男性にとつてどのようなものであつたのだろうか。次に『源氏物語』を「読む」男性について考えてみたい。

紫式部の日記によると、一条天皇は『源氏物語』を人に読ませてお聞きになつていたとされるが、天皇はその物語の中に「歴史」を読みとつていたという。天皇の言葉によれば、この作者は漢籍の知識である「才」があると云つたという。

「才」とは当時の男性が身に着けるべき学問であり、そこには漢籍の影響を受けた日本の正史も含まれる。国の中枢にある天皇にとつては必須のものといつてよい。男性はこうした学問を学ぶことで世の中を知ろうとする。『源氏物語』においても、自身の出生に不信感をいだく冷泉帝は史書に自分のような例を見いださうとしている。男性にとつて必須の学問も女性にとつては不要なものであり、それを表に出すことは知識をひらかすこととされてきたため、この天皇の賛辞は紫式部を快く思わない女房によつて、紫式部の悪口として広まったことは皮肉である。紫式部自身もこのことは誇るべき事としては記していない。ここで確認したいのは一条天皇が『源氏物語』から「才」を「読んだ」ことであろう。それは物語として女性の側から見た歴史を男性として「読む」ことで

あり、世の中を動かしていく男性が理解していた世界を「物語」から「読む」ことができたということになる。それは男性にとつて「物語」から真実を読みとることとなり、男性としての学問を『源氏物語』から読みとつたということに他ならない。

一方で、男性でありつつ、『源氏物語』を作者の意図通り、物語として読みとろうとした男性も存在した。藤原公任である。公任は当時の歌壇の中心的人物であり、一条朝を代表する文化人であつた。また政治的には道長の側近でもいふべき存在であつたとされている。彰子が皇子を出産し、そのお祝いの品として美しく作られた『源氏物語』には、女性のものであつた物語をも男性の世界へと取り込む意図がみえてくるが、公任はそのことを十分に理解していた。公任は、男性として物語を女性の側のものとしてとらえるのではなく、道長が、娘たちによつて作られた繁栄の一つとして、女性の文化までを取り込んだものがこのお祝いの品の『源氏物語』であることを意識した上で、皇子の出生五十日目の華やかな宴席で、紫式部の近くにきて「あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさびらふ」と声をかけたというのである。紫式部はこの呼びかけを無視しているが、公任は宴席で単に紫式部に軽口をたたいたのではなく、『源氏物語』を読んでいます、その女性の主人公は若紫(紫の上)ですわねといったのである。

若紫は理想の女性として読まれるべき人物であることを物語から「読む」ことができたのであった。政治家でありつつ、文化人であった公任は、紫式部に物語の読みを示すことで紫式部がお仕えしている中宮、ひいては道長への敬意を表明したといえるであろう。公任は女性に関わる政治のあり方を物語から「読む」ことができたといえるのではないだろうか。

四 読み継がれる物語と私

『源氏物語』はこうして様々な「読み」を可能にしていくといえるであろう。作者とされる紫式部と同時代の「読み」方をふまえた上で、時代とともに移り変わる読み方を考えていきたい。

『源氏物語』が書かれてからおおよそ五十年後に成立したと考えられる『更級日記』は『源氏物語』への憧れがあふれている。鄙というべき場所で成長した作者のまわりでは、姉や継母達が、物語について自らがかつて読んだ物語の気に入った部分のみを語り合うのを聞いている。作者のいる鄙では、読むべき書かれた物語がないことが作者の不満の原因である。ここからは全体を読み通すのではなく、物語の中から自分の興味に従った部分によって、世の中を知ることが当時の女性の読み方であったと考えることができるであろう。完成した

物語のストーリーを追うことのみが女性の物語の読み方ではないことが見てとれる。

作者は物語を聞きたいのではなく、自分で「読み」たいために都へ早く帰りたいと仏に祈り、都に戻ってからは「読む」ための物語を手に入れることを願う。伯母なる人から『源氏物語』五四帖をもらった時、作者は、今まで部分的にしか知らなかった『源氏物語』を、初めからストーリーを追って「読む」ことに至上の喜びを感じ、作者の様な中流貴族の女性にとっては手に入れることができないうの位すらも及ばないと言ってみせるのであった。このように『源氏物語』はフィクションでありつつ、全体を通して一つの世界観をもったものとして読まれていくようになる。

藤原俊成の養女が記したとされる『無名草子』は十三世紀初頭の成立と考えられるが、女性による物語批評として注目される。物語りを「読み」、和歌にも詳しい、言い換えれば女性として当時の教養を身に付けていたと思われる年老いた尼僧の言葉として語られるのである。物語論の中心は『源氏物語』であるが、ここでは、この尼僧が、物語を人が語ることを聞くのではなく「本に向かひてこそ」と「読む」ことが大切であると説いている。書かれた『源氏物語』を自分で読むことが物語との関係性を持つこととなってきたのである。語る尼僧、聞く若い女房たちは、自分たちの女性の世界とし

て物語を身近なものとしてとらえ、関わりとうとしている。当時、物語は、和歌や漢詩文よりも価値が低いとされていたが、女性達は逆に物語を作るのは男性ではなく、女性であるという自負を持っていることも注目されよう。

こうした時代のなかで男性達における『源氏物語』への意識にも変化が見られる。『源氏物語』の時間的な世界の広がり、登場人物の心理の変化をも細やかに描き出しているが、こうした心の動きをとらえようとする読み方が男性の側にも現れ始めるのである。文学的価値はまだ低く、女性の側のものであっても無視できない存在となりつつあるといつてよいだろう。文学の中心であった和歌の世界では、更に洗練された表現を求めていくが、その時に言葉の背後にある時間の流れ、登場人物の心の動きを和歌の世界に取り入れようとする言葉の背後の世界を取り込むことでより深い世界を表現するのである。

藤原俊成は「千載和歌集」の単独の選者であるほど和歌の世界では並ぶもののない存在であったが、自らが判者をつとめた『六百番歌合』で『源氏物語』と和歌における重大な発言をしている。「冬上」の「枯野」という題において次の二首が番えられたときの判詞である。

左 良経

見し秋を何に残さん草の原ひとつにかはる野辺のけしきに
（秋の間に見た美しい景色を何に残したらよいのだろうか。
秋の間多くの花が咲いた草の原も枯れて見わたす限り同じ景色に変わってしまったている。）

右 隆信

霜枯れの野辺のあはれを見ぬ人や秋の色には心とめけむ
（冬枯れの野辺の荒れ果てた様子を目にとめないひとが秋の寂しい景色には心をとめたのであろうか。）

一見したところ、『源氏物語』は関係なさそうであるが、俊成は、左の「何に残さん草の原」に着目し、この言葉を「艶にこそ待るめれ」と理解して右の関係者が、「草の原」を非難していることに対して批判する。「紫式部、歌詠みの程よりも者書く筆は殊勝也。其の上花の宴の巻は、殊に艶なる物なり。源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」と続けている。この「草の原」は『源氏物語』の「花の宴」における出来事に基づく。二月下旬の紫宸殿での花の宴の夜、源氏が恋慕する藤壺の姿を求めてさまよううちに、女性と出会い、だれとわからぬまま契る。その夜渡された扇が縁で、その女性が源氏に対立する右大臣家の娘朧月夜と知る。

この光源氏と朧月夜との関係が始まるという春の艶なる場面の歌である。「草の原」とは、この場面で朧月夜が詠んだ

「うき身世にやがて消えねば尋ねても草の原をば問はじとや
思ふ（この不運な私がこのまま名告らずに消えてしまうなら、
あなたは私を尋ねてまでも草の原は訪れないとお思いです
か）」という歌の語句である。俊成は左の歌がこのような場面

を読みとった上での言葉と理解した。「草の原」が効果的に
使われている場面を思い浮かべ、それが詠まれた場面と結び
つけたのである。歌われた状況、その時の和歌表現としての
「草の原」とはどのようなものであったのかを考えたといえ
よう。俊成は紫式部は歌よりも「物書く筆は殊勝なり」と紫
式部の和歌よりも物語として描く世界がすぐれていることを
前提として、『源氏物語』を理解しない歌人について「遺
恨」という手厳しい評価を下した。俊成は『源氏物語』の場
面の心を「詠む」のであった。歌壇の第一人者の俊成をして
このように語らせるほど『源氏物語』の文学的価値は高まっ
たのである。もはや当時の古典文学としての作品として読ま
れ理解すべき作品となっていたと考えられる。

一方、俊成と同じ時期に藤原伊行により『源氏釈』という
最も古い注釈書が成立する。ここでは『源氏物語』の引歌、
引詩、史実の典拠が示されている。和歌を作るために必要と
された『源氏物語』の内容そのものを解釈することが必要と
なり、『源氏物語』の文学史的背景を「読む」ことが求めら
れてくるのである。こうして学問として源氏をとらえようと

する動きのなかで学問として形となるのは、藤原定家の『奥
入』を待たねばならない。定家は古典文学としての『源氏物
語』を「読む」ことを重視し学問としての読みをすすめたので
あった。さらに、十四世紀後半になると、足利義詮の求めに
応じた四辻善成は、語句の解釈とともに出典の調査をし、
『源氏物語』の中にどのような史実が取り入れられているか
を説明していき『河海抄』をまとめた。『源氏物語』の中に
史実を「読む」ことで男性の世界から歴史的叙述を説明して
いくのであった。時代ともに『源氏物語』は古典文学として
「読む」ことが求められるようになったと言ってもよい。こう
して時代の変化とともに既に失われていた文化を理解するた
めに注釈はさらに深くなっていく。

江戸時代に、国学が盛んになると国学者を中心に日本の古
典文学としての『源氏物語』という位置づけが確立していく。
『源氏物語』を当時の社会のあり方に従い理解し、古代的な
面から「読む」ことが『源氏物語』の読み方となっていくの
である。本居宣長の『源氏物語玉の御櫛』では、注釈の中心
をなす「読み」方として「もののはれ」を打ち出している。当
時の社会において文学を読む上でも重んじられた正義、善悪
から解放し、人間の本来の心のありかたを『源氏物語』から
読みとったことに他ならない。道徳に従わねばならない時代
だからこそ、時代にとらわれない、古典文学そのもののあり

方を明らかにしたといえよう。もはや『源氏物語』は女性の文学という枠を超え、日本の古典文学として様々な観点から読まれることになるのであった。

女性の手による女性のためのものであった『源氏物語』は女性によって読み継がれてきたものに違いない。女性は男性とは異なった世界を『源氏物語』に見いだし、自分たちの世界を広げてきたはずであろう。また一方で男性の側の史実、和歌、学問の視点からの読み方をとりいれることにより、『源氏物語』はさらに広い世界観をつくりあげていったことも確かであろう。『源氏物語』を「読む」私は、その時の社会、文学を「読む」私でもあったであろう。千年以上も前に成立した『源氏物語』はこうして時代とともに多くの「読む」という営みをなしてきたのであった。